

提 言

前橋空襲と終戦75年を迎えるに当たり

昭和から平成、そして令和の時代を迎え、令和2年（2020）は、昭和20年（1945）8月5日の前橋空襲、同15日の終戦から75年の節目の年となりました。

令和2年（2020）8月15日も、政府主催の全国戦没者追悼式が日本武道館で、コロナ禍で20府県の遺族が欠席するなか行われ、約310万人の戦没者を悼みました。厚生労働省によると、参列予定の戦没者遺族は70代以上が8割を占め、最高齢が93歳、最年少は12歳。高齢化に伴い妻の参加予定者は1人で、父母の参列は平成23年（2011）から途絶えています。戦没者遺族も高齢化や減少が進み、10代以上で戦争を経験したのは85歳以上の世代となりました。

時代の経過とともに、戦争体験者が高齢化・減少したりする中で、「戦争は体験者が語るというあり方から新たな方法」が求められています。

前橋市では自治会、市民及び団体によって「前橋空襲」を語る努力が続けられてきました。市当局でも生活課、市立図書館、前橋文学館などで企画展や行事を開催してきました。平成27年（2015）は戦後70年、前橋空襲70年の年でした。この節目の年に前橋空襲をテーマとしたミュージカル「灰になったまち」が上演されることが決定しました。そこで、その1年前に当たる同26年（2014）7月19日から8月19日まで、戦争や前橋空襲を語り継ぐため、歴史文化遺産活用室（文化国際課）・生活課・前橋文学館・市立図書館が共同で、住吉町自治会・あたご歴史資料館・ぐんまマチダ戦争と平和資料館・広瀬川美術館の協力を得て、「まえばし・戦争を考える展～前橋空襲と復興～」を開催し、市の平和事業・教育のあり方の模索のスタートとしました。

平成28年（2016）から毎年8月5日には歴史文化遺産活用委員会の「街なか神社・寺院・教会プロジェクトチーム」が自発的に市民に呼びかけ、各宗教施設で信仰・立場などを超え、一斉慰霊を行うとともに、前橋空襲体験者の原田恒弘氏（あたご歴史資料館学芸員）から学んだ学習成果をもとに前橋学市民学芸員が前橋空襲を語り継ぐ行事を行ったところ、「前橋らしい慰霊の仕方」という評価を得て、現在まで継続しています。

戦争や前橋空襲をテーマとしたミュージカルも隔年で「我愛你（ウォーアイニー）」（平成29年度）、「鎮魂華」（同31年度）と3回上演しました。また、歴史文化遺産活用委員会では、前橋空襲のあった8月5日を「前橋市民の平和祈念の日」とするよう提言書に盛り込みました。

いっぽう、市民団体でも「前橋に平和資料館設立をめざす会」が毎年企画展や講演会を開催し、市へ平和資料館設置の陳情を行っています。平成30年（2018）、前橋市出身

の映画監督・飯塚俊男氏により前橋空襲も対象とした『陸軍前橋飛行場—私たちの村も戦場だった—』が公開されたことで、前橋空襲が全国的にも注目され、同映画内で語られた空襲体験者の証言の重要性が再確認されました。

住吉町自治会では、平成24年（2012）に市から母子健康センターを借り「あたご歴史資料館」を開設し、前橋空襲体験者が自らの力で戦争を語り継ごうと、市の協力を得ながら活動を展開してきました。しかし、開設当初8人いた体験者の語り部も2人に減り、高齢化したため、令和2年（2020）3月で閉館となり、収蔵資料を市へ同年11月に寄贈しました。

このように、前橋空襲及び戦後75年を前に、この5年間、市・市民・自治会・市民団体によって「前橋空襲を語り継ぎ、戦争関係資料の保存と展示のためのあり方」の模索が行われてきました。

こうした流れを踏まえ、山本市長は令和元年（2019）11月12日の定例記者会見で、前橋空襲・終戦75年を迎えるにあたり、「前橋空襲を語り継いでいくこと」「平和資料の収集や展示のあり方」について、今こそ前橋市として検討をスタートする時期であると考え、『前橋空襲を語り継ぎ、平和資料を収集展示の形の検討会』（以下、検討会とする）を設立し、委員による活発でオープンな議論により、前橋らしい方向性が出されることを期待すると表明されました。

検討会とコロナ禍での活動

市長の諮問を受け、この検討会が設立されました。委員の構成は資料（名簿）の通りで、検討会は市民の多様な意見を集約し、プロセスを可視化して、前橋空襲を語り継ぎ、平和資料の収集展示の方向性をまとめ、市長へ提言書として回答するものとなりました。

検討会では会議を公開し、1年余りの間に11回開催しました。第1回を令和元年（2019）11月26日に開催しスタートしましたが、コロナ感染症の拡大に伴い、当初の予定の変更を余儀なくされました。しかし、内容的には計画通りの活動を展開することができました。

活動の詳細は資料（会議録ほか）の通りですが、概要は次のようでした。第2・3回では、構成委員の市民団体や資料館、市の関係部局の活動を報告し、情報や意識の共有化を図りました。第4回は先進地視察として熊谷市を訪問しました。第5回は熊谷市視察を振り返りました。第6回はより多くの市民の声を反映させるため、市民の活動や前橋空襲体験談、提言を聞く場としました。第7回は市街地にある「呑竜仲店」を資料館に利活用して欲しいとの提言を受け、同所を視察しました。第8・9回は前橋空襲に関する問題点について議論し、令和2年（2020）12月にはあたご歴史資料館からの寄贈資料を中心に「戦後75年 前橋空襲 特別展」を市立図書館2階展示室で開催しました。

このように委員の情報・意識の共有化、視察、市民との対話、企画展の開催など共同作

業を積み重ねた上に、第10・11回で提言書のまとめに向けて議論を行い、この提言書を完成するに至りました。

次世代にどのように語り継ぐのか

検討会とその活動をNHKのテレビニュースで知った市内在住の田村敏枝さん（81）から手紙をいただきました。田村さんの生家は県立前橋高等女学校（前橋女子高校）の裏にあり、田村さんは6歳の時に前橋空襲を体験されました。手紙には「戦時中戦後の暮らしを知る人の高齢化を思う時、六歳であってもそれなりの空襲や戦後の体験があり、小学校で“お話しして下さい”と言われたこともありましたが、お話しするほどのことではないと思っていましたが、私なりに感じたり経験したりしたことをお話ししてもいいかなと考え又他の方の体験など伺って見るのも当時を知ることになるかなと考え、そのような集まりでもあれば参加してみたいと勝手なことを思いお手紙を差し上げました」とありました。そこで、第6回検討会（令和2年9月30日）で田村さんに体験談を語っていただきました。

前橋市の生涯学習奨励員の指導に当たられている島田兼之さん（99）は、小学校教員であった昭和16年（1941）に召集を受け、陸軍歩兵として旧満州（中国東北部）に派遣され、その後、島田さんの属した部隊は、漢口（武漢）から台湾に移りました。終戦後は再び小学校の教師になりました。75年以上たった今でも左腕には生々しい傷跡が刻まれ、凍傷を負った右足の指は、爪がはがれる後遺症が残っています。島田さんは「戦争は惨めなものだから」と家族にも体験は話さなかったそうです。89歳の時、小学校の校長から再三の依頼を受け講演をして以来、体験を口にするようになりました。東京新聞の取材を受けた島田さんは「戦争をすると、人間は汚くなる。」「人を撃つなんて残酷なことはあってはならない。なのに、戦場では何も考えられなくなる。自分の命のために引き金を引かざるを得ない。」「亡くなった人たちに思いを馳せ、平和を続けるにはどうすればいいか、常に考えないといけない。」と体験談を語っています。取材した前橋支局の市川勘太郎記者（27）は、「この取材で、戦争の悲惨さを分かったとは、とても言えない。ただ、『人間が汚く』なるような時代が二度と来てはならないと痛感した。『平和を続けるため、常に考えること』。島田さんのその思いを受け継いでいくことはできる」とコメントしています（東京新聞2020年8月11日）。

第12回群馬県小中高生新聞感想文コンクールの発表がありました（上毛新聞2020年11月15日）。中学校の部で、大泉町立西中学校1年の菅田結菜さんが『戦争遺跡』の想いを受け継ぐために」と題する文章で優秀賞を受賞しました。菅田さんの文章は次の問題提起から始まります。

一九四五年八月十五日、それは終戦の日と言われています。毎年夏になると戦争に関する新聞記事を多く見ます。戦争の悲惨さや被爆者の苦しみなど、どれも胸が痛くなる

内容です。私は、過去の日本を知りたいという思いから、戦争関連の記事をなるべく読むようにしていますが、ある日の記事で考えさせられる内容がありました。「戦争遺跡受け継ぐために～老朽化、資金難、保存に課題」という内容の記事です。…(略)…日本各地にある戦争遺跡ですが、どれも老朽化が進み、維持や保存には多くのお金が必要であるという話は、ニュースでも聞いたことがありました。しかし新聞記事を読み進めると、想像以上の莫大なお金がかかるということにとても驚きました。地震が多い日本においては、耐震性の問題も一緒に考えなければなりません。維持や保存のための資金源というところで、難しい問題のようです。戦争を体験し、その悲惨さを語ってくれる人が年々少なくなりつつある今、戦争遺跡はこれからの時代に、戦争の恐ろしさを伝える唯一の手段であると思います。だからこそ、これからも守り続けなければいけないものであると思います。…

菅田さんは、「戦争の怖さを知らない世代が、戦争の恐ろしさを知るためにも、“物言わぬ証言者である戦争遺跡”の存在の意味は大きいはずです」と、多くの人に戦争遺跡の保存に関し理解してもらうことの大事さと維持のための寄付を呼び掛けています。そして、戦争を次世代に伝えるために、次のように訴えています。

終戦から七十五年、戦争は昔の出来事として一見完結したように見えます。しかし実際には、今もなお被爆による後遺症で苦しむ人、家族や友人を亡くし悲しみが癒えない人が沢山います。多くの人を傷つけ、命を奪った戦争の恐ろしさを次世代へ伝えていくためにも、戦争遺跡をその想いととも、受け継いでいかなければならないと改めて感じました。

中学1年生の菅田さんには、94歳になられた曾祖母がいるそうです。菅田さんの曾祖母は10代で長い戦争を経験しました。その経験を菅田さんによく話しているそうです。そうした環境の中で育った菅田さんだからこそ、「過去の日本を知りたいという思いから、戦争関連の記事をなるべく読むようにして」、老朽化する戦争遺跡の維持に関する記事に関心を持ち、「戦争遺跡をその想いととも、受け継いでいかなければならない」と感じたのでした。

菅田さんの文章を読んで感銘を受けた米田一男さん(太田市・82歳)は、上毛新聞「ひろば」欄(2020年12月7日)に投稿し、次のように述べています。

…菅田さんが心配されているように、これからは戦争体験者が急速に減少していくので、戦争遺跡の役割はさらに大きくなります。／私が住んでいる旧宝泉村の地域は、元公民館の敷地に数百人の戦死者の名前を刻んだ忠霊塔があります。宝泉小の一角には日中事変に従軍した人の名前を刻んだ記念碑が立っています。この地域からこれほど多くの男性たちが出征し、アジアや太平洋地域の国々で戦ったのです。その陰には、送り出した家庭があったことが分かります。／戦争は攻撃する方も、される方も死ぬまで戦うようになるから、起こらないようにしてくれ。戦争遺跡からは、そう訴える悲痛な声が聞こえる気がします。

終戦から年月を重ねるに従い、戦争を体験した人は減っていきます。しかし、戦後75年経っても、このように平和を願い、戦争を語り伝えようとする国民的な意思は脈々と流れています。この流れを断絶させないためには、どうしたらいいのでしょうか。いまは、そのための努力が必要なときです。

公的資料館はなぜ必要か

戦争体験は、置かれた位置や立場、世代によってもさまざまに多様です。指導的地位にあった人や一兵士の体験史もあれば、銃後の女性の戦争体験という戦争の時代の生活史もあります。終戦から50年、60年、70年と経過すると、自らの人生の終末を意識しながら、自己の戦争体験と向き合い、自身の人生の総括として戦争体験者はその体験を語っています。

戦争体験者の証言は、再び戦争の体験を繰り返してはならないという問題意識に立っています。戦争体験世代のこの意識が政治的枠組みを超え、戦後日本の平和意識の基盤を形成してきました。戦争体験世代の大幅な減少は、その意識の風化でもあります。

そこで、「戦争体験の記録」（資料の収集・保存）と「戦争体験の継承」（展示）の機能をもつ資料館（博物館）を公的に設けることが必要になってきます。

市民の所有する戦時・占領復興期の資料を受け入れる公的な機関があって、その収集を呼びかけられれば、多くの資料が集まり、聞き取りと共に次の世代につないで行けます。戦争の記憶の継承には、扱いやすい形式で、かつ資料が多くあることが望まれます。記憶の継承は、資料の保存のあり方や公開のされ方に多くを負っています。それゆえに公的な資料館が必要なのです。

公的な資料館は、「地域の記憶の場」として、①過去を共有し未来を築くための力を養い、②平和形成力（ピースリテラシー）を育む—平和教育の拠点、すなわち「亡くなった人たちに思いを馳せ、平和を続けるために、常に考える場」となるに違いありません。

資料館設立についての案

検討会では、公的な資料館設立について、1、規模や大きさ・2、機能—二つの観点から、全国の事例を示しながら、次のように論点を整理しました。

1、規模・場所—ハコモノとして(前橋空襲と復興資料館と表記)

A案:新しく前橋空襲と復興資料館を建設する

- 日本の近代史の歴史の流れの中で「前橋空襲と復興」を位置づけられる。
- 前橋市の誇れる文化施設となる。
- ◎小中学生の学習の場として、大型バスが入って来られるような場所が良い。

◎前橋市の誇れる名所として公共交通の便利な場所がよい。

●建設費、維持費など経済的負担が大きい。

●市立の博物館などがないという文化施設環境の中で、特化したものができるマイナス面もある。

《先進事例》

【兵庫県姫路市平和資料館】

○趣旨

戦争末期、姫路市は2度の大きな空襲により市街地の大半が焦土と化し、500人以上の人命が失われた。姫路市が行っている「平和都市宣言」「非核平和都市宣言」に基づき、戦争の惨禍と平和の尊さを後世に伝え、平和な社会の発展に寄与するため、空襲に視点を置いた資料館として、平成8年（1996）4月に開館。

○建物

鉄筋コンクリート2階建

○展示内容

1階—常設展示室、図書室、ビデオコーナー、事務室

常設展示室—「美しい城下町・姫路」「覆われた姫路城」「炎の中の姫路城」「よみがえる姫路城」「平和を祈って」の5つのテーマに沿って、姫路の市民生活や戦争被害を中心とした展示。当時の市民生活や姫路空襲の写真、物品、再現模型を展示。AVコーナーでは全国の戦災都市の資料映像、姫路空襲体験談や姫路空襲体験記朗読会、戦争当時の紙芝居をデジタル化した映像を放映。

2階—多目的展示室（企画展示室）、会議室、ホール、収蔵庫

毎年、戦争の惨禍や平和の尊さを啓発するため「春季企画展」「非核平和展」「秋季企画展」「収蔵品展」を開催。

○開館時間、入館料金

午前9時30分から午後5時。常設展示室：一般200円、小中学生50円。企画展：無料。

○入館無料日

5月5日（こどもの日）・6月22日（姫路空襲の日）・7月3日（姫路空襲の日）・7月22日（姫路市平和都市宣言の日）・8月15日（終戦の日）・10月26日（太平洋戦全国空爆戦没者慰霊の日）・11月23日（勤労感謝の日）

○交通

JR西日本・姫路駅から徒歩30分。山陽電気鉄道・手柄駅から徒歩15分。

○関連施設

「太平洋戦全国戦災都市空爆死没者慰霊塔」—昭和22年（1947）1月、姫路市長・石見元秀が全国で被災した都市（東京と112市町）に呼びかけ、全国戦災都市連盟（現・

一般財団法人太平洋戦全国空爆犠牲者慰霊協会）が結成され、同27年（1952）4月に恒久平和確立の象徴として慰霊碑建設が提案され、姫路市手柄山を選定し、同31年（1956）10月26日に竣工。毎年10月26日に太平洋戦全国空爆犠牲者追悼平和祈念式が行われている。碑は60年が経過し老朽化し、維持・修理には費用を要することから総務省への移管を検討中。

○姫路市には、市立博物館、市立美術館、市立水族館などの文化施設があり、その上に平和資料館を建設。これらの文化施設とともに観光スポットにもなっている。

○管轄は姫路市役所健康福祉局保健福祉部平和資料館。

【静岡県浜松市浜松復興記念館】

○浜松市は艦砲射撃を含め27回の空襲を受け、多くの人命が奪われ（昭和20年2月5日150人、4月30日1,000人、5月19日450人、6月18日1,800人、7月29日170人など）市街地が焦土と化した。戦争体験者が年々少なくなり、戦争の記憶が風化されつつある現代において、現在の浜松の発展の陰には昭和20年（1945）6月18日の「浜松大空襲」に見舞われながらも、終戦後に復興事業を推し進めた市民の努力があったことを忘れてはならない。戦後いち早く着手した復興土地区画整理事業も、昭和58年（1983）3月に終了。そこで、事業終了を記念し浜松復興記念館を昭和63年（1988）に開館。

○浜松の今日に発展の支えとなっている復興の記録及び当時の市民の姿を保存・展示し、浜松大空襲や市民生活、文化、街並みの変遷を後世に伝えるとともに、全市挙げて取り組んだ戦災復興の記録を通じて、浜松の発展そして将来について、広く考えてもらう場所。

○鉄筋コンクリート2階建。1階入館無料の展示スペース・事務室。2階は会議・研修・講座など多目的スペース（会議室）。展示構成は「戦時体制下の浜松」（昭和6～20年）・「立ち上がる浜松」（昭和20～37年）・「躍進する浜松」（昭和39年～）。

○立地場所は市役所・中央図書館・教育文化会館などが集まるゾーン、JR 浜松駅から徒歩10分。専用駐車場はない。

B案：博物館が建設されたい、図書館がリニューアルされたいした場合、その中に前橋空襲と復興のコーナーを設ける

○A案の課題である費用的負担が軽減できる。

○博物館内ならば前橋空襲が前橋の歴史の中で位置づけできる。

●狭いコーナー展示に終わってしまう可能性もある。

◎前橋空襲は前橋の歴史の中で特筆すべきものとの視点から、博物館に設けるならばテーマ展示になるような配慮が必要。図書館のリニューアルならば、図書館が図書館、博物館、文書館、平和資料館を併設するような総合博物館的施設になることが望ましい。な

お、博物館の建設は第1期歴史文化遺産活用委員会でも提言した。

《先進事例》

【岡山県岡山シティミュージアム岡山空襲展示室】

- 岡山シティミュージアムは、平成17年（2005）6月に岡山市の歴史と現在の姿を記録・展示し次世代に引き継ぐことを標榜し「岡山デジタルミュージアム」として開館。岡山駅西口に建設された再開発ビルのリットシティビル南棟の4・5階。4階が企画展示室・講義室など、5階が常設展示室・事務室・ショップやカフェなど。古代から現在に至るまでの岡山市を中心とした地域の歴史や生活文化実物資料と最新のデジタル技術を用いた展示が行われる。市民の生涯学習と小・中学生の学習の場、観光拠点。平成24年（2012）に名称変更し「岡山シティミュージアム」。
- 岡山シティミュージアムの5階フロアに、「終戦から70年以上が経過した今、薄れつつある岡山空襲（昭和20年6月29日、市街地の約63%が焼失、1,737人以上の死者）の記憶を決して風化させず、後世に伝えていくために」常設の「岡山空襲 展示室」を設置。
- 岡山シティミュージアムは市民生活局スポーツ文化部岡山シティミュージアム。しかし、岡山空襲展示室は岡山市福祉援護課が担当。
- 「戦災関連資料や岡山空襲の体験談などの募集」一資料収集や聞き取り調査も行う。
- 学校への出張展示（資料貸出）、教材提供を行う。

【埼玉県熊谷市立図書館美術・郷土資料展示室(熊谷市立文化センター)】

- 熊谷市立文化センターはJR熊谷駅近くに昭和54年（1979）に開館。市民の芸術・文化・教養の向上を図るための総合文化施設。地上4階、地下1階の建物の中に、図書館・プラネタリウム館・大小会議室と美術・郷土資料室を備える。同56年（1981）には文化会館も併設。
- 市立図書館は、図書館活動のほかに美術・郷土資料展示室を活用し総合博物館的な展示事業と教育普及活動を実施。全国的にも特色ある図書館として注目されている。美術・資料展示室は図書館3階にあり、各種資料を所蔵する収蔵庫も3室ある。美術品の収蔵庫は24時間空気調整を行うことができる。
- 調査研究機関として、地域に根差した郷土史、民俗学、郷土芸術文化など市民の理解と協力を得て、調査研究活動を展開。資料収集活動も行う、市民からの寄贈を受け入れている。
- 図書館が運営しているが、展示室事業や教育普及活動、調査研究のため、人事異動により文化財保護課などから学芸員が派遣されている。
- 美術展示室を利用し、5年ごとに「熊谷空襲」の展示を行う。戦後50年のときに市民の呼びかけ資料調査したものを展示。
- 郷土資料展示室には、ジオラマなどを使った「熊谷空襲」の常設展示コーナーがある。小学校1、2年生が総合学習の時間にやってくる。

【兵庫県西宮市平和資料館(西宮市教育文化センター)】

- 昭和60年(1985)に西宮市立図書館をリニューアルするにあたり、市立郷土資料館を新設することが決まり、両館一体型施設として西宮市教育文化センターが開館。
- 平成14年(2002)に西宮空襲(昭和20年5月から8月に5回空襲)を風化させないためセンター内1階に開館。市民からの寄贈資料を中心に展示。遺族に戻らぬ骨壺も展示。展示構成は次の7テーマ。①戦争への道程・開戦、②出征前・銃後の家族や郷里、③戦場の兵士、④戦争の経過、⑤空襲、⑥終戦、⑦未来にむけて。
- 西宮市教育文化センターは、西宮市立中央図書館・市立郷土資料館・市平和資料館・市民ギャラリーの4施設で構成される複合型の公共施設。
- 地階：書庫・ワークルーム・収蔵庫・工作室・燻蒸室など。1階：平和資料館・郷土資料館常設展示室と事務室・図書館。2階：図書館事務室・市民ギャラリー第1、2展示室・集会室・講座室・研修室・特別研究室・コンピュータ室。3階：市民ギャラリー第3、4室・学習室・テラス。

C案：小・中学校など統廃合で廃校になった校舎を転用する

- A案の課題である費用的負担が軽減できる。
- 展示、収蔵、啓発、調査などの活動を行うスペースは十分とれる。駐車場も確保できる。
- ◎旧市内の小・中学校―旧中央小、旧二中などが候補。
- 空調などの設備がないため、資料の維持保存に問題が生じる。

《先進事例》

【埼玉県熊谷市スポーツ・文化村「くまびあ」平和資料展示室】

- 熊谷市立女子高等学校が平成20年(2008)3月末日で廃校となり、5年後の同25年(2013)に生涯学習センター「熊谷市スポーツ・文化村“くまびあ”」に生まれ変わるにあたり、同施設内に同26年(2014)4月「熊谷空襲」を伝える常設展示施設として、平和資料展示室を新設。
市民からの寄付「平和基金」1,200万円をもとに、戦後70年(同27年)を迎えるに当たり設置。
- 施設の管理は教育委員会、平和資料展示室は庶務課が担当。広さはひと教室分。
- 市内の小学校在学的に定期的に来ている。
- 展示内容は「戦前・戦中の生活の様子」「熊谷空襲」「戦災概要図熊谷」「復興・平和への道」「映像で見る熊谷空襲」で構成。
- 展示機能だけで、資料収集・保管などの機能はない。

D案:まちなかの空き店舗を転用する

- A案の課題である費用的負担が軽減できる。
- 前橋空襲の被災地に立地するので、前橋空襲慰霊碑など関連遺跡と連携することができるなど、立地的なメリットがある。
- 文学館、アーツ前橋などと連携し、マチ巡りの観光スポットになり、街なか活性化の役割も担える。
- ◎市民より検討会に対し、まちなかに立地する「呑竜仲店」の活用という提案を受けたが、視察・協議の結果、独創性や熱意は評価できるが、教育的な観点をはじめ資料保存、展示スペースなど多くの問題を抱えているとの結論に達した。
- 十分な展示、保存、教育普及活動のスペースが取れるかが課題。
- 駐車場の確保も課題である。
- 資料保存の空調設備も必要である。

《先進事例》

【新潟県長岡市長岡戦災資料館】

- 平成15年(2003)7月、長岡空襲の惨禍を記録・保存し、伝えていくために開設。はじめはダックシティ・イチムラ百貨店跡に開設され再開発事業により、現在の森山ビル内へ移転。
- 長岡空襲を語り継いでいくための市民活動の場で、空襲を体験された市民と、戦争を知らずに育った戦後世代の市民とが、力を出し合い、平和のために一緒になって活動し、次世代に平和の尊さを伝える場。
- 運営ボランティア(館の活動を支える)と学生ボランティア(長岡空襲を確実に次世代に語り継ぐため)を募集。運営ボランティアが展示資料などの案内、展示資料の整理や企画展の準備、自主事業の企画を考える全体会議などを行う。
- 書籍『長岡空襲の体験記』(Ⅰ～Ⅷ)、『長岡空襲体験画集』、『太平洋戦争と長岡空襲』『左近の爆弾』『語りつぎたい長岡空襲』『語りつぐ長岡空襲』を販売。
- JR長岡駅から徒歩5分。付近に河井継之助記念館、山本五十六記念館があり、周遊して長岡市の幕末から敗戦までの歴史が学べる。観光スポットでもある。
- 専用の駐車場はないが、周辺の駐車場を利用。
- 空襲犠牲者は1,488人であったが、同館で352人の遺影を収集。平成19年(2007)から毎年夏に館内にその全写真を展示し、「追慕の集い」を開催。
- 事前予約で団体(学校など)の見学を受け入れる。
- 担当は市の庶務課。

【長岡花火と長岡空襲慰霊】

- 昭和20年(1945)8月1日長岡空襲(午後10時から、市街地8割焼失、1,488人

死亡)。1年後の同21年(1946)8月1日「長岡復興祭」、2年後の同22年(1947)8月に「長岡花火」の復活。「長岡花火」には慰霊・復興・平和への祈りが込められている。

○8月の平和を祈る行事

8月1日

戦災殉難者慰霊祭(午前6時から 平潟公園)／戦災殉難者墓前法要(午前7時から 昌福寺)／空襲で亡くなった子どもたち・教職員と市民を追悼する集い(午前8時から8時30分 平和の森公園)／長岡市平和祈念式典(午前9時から9時50分 アオーレ長岡)／柿川灯籠流し(午後7時から 柿川)／慰霊花火の打ち上げと梵鐘の打ち鳴らし(花火午前7時、午後10時30分。梵鐘午後10時30分)／ながおか平和フォーラム、市民における映画の集いなど。

8月1～3日

鎮魂たむけの花(午前10時～午後5時 アオーレ長岡)

8月2、3日

「長岡まつり」と「長岡花火」－花火「白菊」3発は犠牲者への慰霊で手を合わせる。

E案:既存の民間施設の公的利用－ぐんまマチダ戦争と平和資料館

- A案の課題である費用的負担が軽減できる。
- 実物資料で語るという点で資料数が全国でもトップクラスの豊富さである。
- 展示、資料の受け入れなど業務実績があり、そのキャパも十分ある。
- 駐車場も確保できる。
- ◎第1期歴史文化遺産活用委員会では①広瀬川沿いの前橋空襲慰霊碑・あたご歴史資料館を含む一帯を「戦争・平和ゾーン」として整備することや②ぐんまマチダ戦争と平和資料館のある駒形地区を町田酒造(酒蔵)や粕谷製麺などととも歴史文化遺産を活用した地域づくりをするよう提言した。
- ◎全国の地方空襲を主な対象とした資料館は、市民や民間団体から資料の寄託や寄贈を受けて開設したところが多くみられる。資料や施設を寄託のような形で受け入れることもできる。
- 市で運営するとなれば、展示内容や構成などの見せ方(パネルの設置など)について現状を変更することなどの課題がある。

F案:公共施設のあり方を見直す中で、そのなかに前橋空襲資料室を設ける

人口減少社会、財政難の時代を迎え、高度経済成長期に設置した公共施設が老朽化し、その改修や維持にあたり、見直しが時代的課題となり全国的に統廃合や再利用などが行わ

れている。また、マチの再開発や町村合併などにおいても公共施設のあり方が見直されている。公共施設のより効率的な利用は、本市においても同様のことが言えよう。こうした動きに合わせて公共施設内に、前橋空襲資料室を設ける。たとえば、アーツ前橋、グリーンドーム、旧日本間酒造店などの中に併設する。

《先進事例》

【香川県高松市民文化センター・平和資料室から高松こども未来館・平和記念館へ】

○高松市民文化センター

昭和47年(1972)に開館。本館にはプラネタリウム、松島図書館(市図書館の一つ)、講堂・集会室、生涯学習に利用される各種教室があり、別館には体育館や多目的大ホールがある。平成20年(2008)に高松市民栄誉賞第1号の中西太からの寄贈資料を展示する「怪童 中西太記念コーナー」を本館1階に開設。

○平和記念室

平成7年(1995)7月、戦後50年にあたり本館1階に平和記念室を開設。高松空襲(昭和20年7月4日。死者1,356人)により焦土と化した市内の写真パネル、投下された焼夷弾のレプリカ、市民から寄贈された遺品などを展示。

○老朽化により本館はこども未来館、別館は高松市医師会館へ

平成22年(2010)に施設の老朽化と耐震性問題から同24年(2012)に閉館(39年8か月)。本館は改装され子どものための教育・福祉事業に特化し「こども未来館(たかまつミライエ)」としてプラネタリウムや児童図書館などを併設。別館は建て替えて高松市医師会館(医師会事務局、高松市医師会看護専門学校、高松市夜間急病診療所が入る)。

○平和記念館

平成28年(2016)11月にこども未来館の5階に開設。床面積は平和記念室と同程度。展示は平和記念室の「戦前・戦時下の高松」「高松空襲(昭和20年7月4日)」「終戦・戦後の高松」の構成を踏襲し、新たに「映像学習室」「平和への取組み・核兵器の廃絶」ゾーンや「企画展コーナー」を新設。魅力付けとして「高松市のジオラマ」(高松市の市街地の白い模型に、高松空襲の様子や空襲による被害状況、空襲後の写真と現在の写真を投影し、高松空襲を分かりやすく伝える)を設置。「高松空襲6人の証言」では6人の体験者がDVDで語り伝える。「映像探索コーナー〈おばあちゃんお話しして〉」では(戦争中の暮らし―衣食住―)(戦争中の子どもたち―教育―)(戦争中の社会―経済や制度―)の三つの映像を自由に選択し見ることができる。漫画でおばあちゃんが孫に伝えるようになっている。平和学習の機能を充実させるため、映像学習室には100インチのスクリーンを設置し、小学校の1クラス40名が学習できる。平成24年(2012)に寄贈になった「百十四銀行高松支店の迷彩柄の壁」(空襲に備えて政府の命令で外壁を白黒の縞模様塗装。別棟解体工事で露出、市民の保存要望で銀行は一部を市に寄贈。)は「防空偽装コーナー」として独立させ壁の一部として展示。レファレンス・事務室・倉庫・収蔵庫を備える。

【広島県^{みよし}三^{みうさか}良坂 平和美術館】

○広島県三良坂町が昭和61年（1986）に非核平和都市宣言を行ったのを記念し、平和・人権・文化の町づくりのシンボルとして平成3年（1991）に地域文化への貢献を目的に町立として開館。平和がつく美術館は世界でここだけ。広義の平和をテーマとする。合併により三次市立となる。

○三良坂町出身の画家・柿^{かきてしゅんぞう}手 春 三 の作品を常設展示。「平和」をテーマに年6回の企画展を開催。

○平和と戦争の芸術的展示は美術館でも可能。

【東京都中野区平和資料展示室】

○中野刑務所跡地を昭和55年（1980）から「平和の森公園」として順次、整備するなかで「平和資料展示室」を設置。下水処理場と公園の兼用として計画した防災公園。

○平成29年（2017）より再整備し令和2年（2020）に再オープン。園内に麒麟レモンスポーツセンター（中野区立総合体育館）が設置されるのに伴い、同年11月6日に同館1階に中野区立平和資料展示室を新たに開設。

○展示構成は①中野の空襲、②人々の暮らし、③中野の学童疎開、④広島・長崎への原爆投下、⑤中野区の平和への取組。平和に関する書籍（約200冊）が自由閲覧。平和に関するテーマの企画展を行う。来館者に折り鶴を折ってもらう「中野区折り鶴プロジェクト」を実施。

2、機能一運営・展示・資料収集・調査研究・普及・地域づくりー

上記で述べたA～F案のいずれに決定しても、以下の機能を備えたものにするを求めます。

(1) 運営

○企画展示、資料収集、調査研究など市民の主体的・自発的な活動に支えられる体制とする。

○市の人的物的負担を軽減し、持続的な施設となるよう官民協同の態勢とする。

《先進事例》

【岐阜県岐阜市平和資料室】

○岐阜市は昭和63年（1988）「岐阜市平和都市宣言」。これを受け「岐阜空襲を記録する会」など市内の各種団体が「岐阜市平和館をつくる会」を結成し市に要請。平成14年（2002）に市文化生涯学習課（現在は市民協働推進課）所管の施設として「岐阜市平和資料室」（JR岐阜駅東高架下のハートフルスクエア-Gの2階。公益財団法人岐阜市教育文化

振興事業団が運営する生涯学習の拠点）が開設された。

- 市民による組織である「岐阜市平和資料室・友の会」が主体的に運営。友の会がボランティアで案内役。展示の内容やイベントは友の会で相談し、市に提案。展示パネル作成や展示品の収集、広報活動も行う。
- 岐阜空襲は昭和20年（1945）7月9日（市街地の約8割、死者863人）。7月9日を「平和の日」として、毎年、午前9時に市内一斉に「平和の鐘」が鳴らされ、犠牲者を追悼し平和を祈る（市主催の「平和の鐘」式典が行われ、市仏教会が中心となり市内寺院など130か所で打ち鳴らされる）。市が市民に折鶴を呼びかけ毎年10万羽が集まり、平和資料室に展示。
- 平成30年（2018）にNHK〔持論公論〕番組の「戦争を伝える遺品をどう引き継ぐ」で、その運営が評価された。全国に260か所を数える戦争と平和を伝える施設は、戦後50年を前に市民グループや遺族会などが設置した。しかし、資金難や後継者がいない、遺品の引き継ぎ手がないなど運営が困難になっている中であって、岐阜市平和資料室は市民グループが資料を市に寄贈し、ボランティアとして活動に参加しているとして、長岡戦災資料館（長岡市）、昭和館（厚労省）とともに評価された。

（2）展示

- 「常設展」と「企画展」「新収蔵品展」「巡回展」の展示事業を行う。
- 「常設展」は前橋空襲と復興を中心としたもの。
- 「企画展」は日本の近現代史の流れの中で戦争や平和について学べるもの。
- 「新収蔵品展」はその年度に市民などから寄贈や寄託を受けた資料を展示するもの。
- 「巡回展」は各地域の公民館などで展示するもの。
- 中学校の教科書に準拠した内容・記述。
- 実物資料・模型・パネル・映像などを活用。
- 実物資料のハンズオン（触れる）。

《先進事例》

【茨城県水戸市平和記念館】

- 水戸市政120周年事業の一環として既存の市民ギャラリーを改装し、平成21年（2009）に開館。水戸市立博物館などで行われていた「戦争の悲惨さと平和の尊さを伝える展示」を「常設展示で後世に伝えてほしい」という市民の声に応えた。
- 水戸空襲は、空襲被災全国57中小都市の中では飛来機数で6番目、投下爆弾量で7番目という大規模なもの。しかし、死者242人、重傷者144人、軽傷者1,149人と犠牲者が空襲の規模の割に小さかったのが特徴と言われ、その理由にあらかじめピラにより空襲が予告されていたことや避難訓練が行き届いていたこと、水戸の地形そのものが広く避難場所が多かったことが挙げられている。そのかわり、建物被害が大きく、全市面積の35%、市街

地面積の65%が罹災。罹災戸数1万104戸(全市の90%)、罹災人員5万605人に及んだ。近隣住民の協力で食糧難にも陥らず復興が早かったのが水戸市民や茨城県民の誇りとされている。

○水戸市の空襲による被災状況、戦時中の市民生活などについて、当時の資料や写真パネルを用いて、展示室1・2(2・3階)に約100点を展示。「水戸の戦災を物語る小さなミュージアム」。

○入館料は無料。担当は文化交流課。水戸駅北口から徒歩6分。

○戦後75年、水戸市政130周年の令和2年(2020)に展示をリニューアル。「第1章、戦争へ突入する日本」「第2章、戦時中の水戸のまちと人々の暮らし」「第3章、水戸空襲」「第4章、戦後復興する水戸のまち」「第5章、未来へ伝える」と時系列にして展示。英語のキャプションを付け、古く見づらくなった写真を復元。身長130センチの小学生を想定して作った防空頭巾を被ることができる〈自由に触れる展示物〉などや3階では戦争体験者による語り部の映像を放映。

○「戦災・戦争関係資料の寄付のお願い」を次のように行う。

「平和記念館で展示している資料は、市民の皆さまから寄付されたもの又は借用したものです。／展示品の充実を図るため、戦災・戦争関係資料の提供に御協力をいただける方の御連絡をお待ちしています」

(3) 資料収集

○市民から戦争に関する資料を全面的に受け入れ保存・活用すること。また、市民以外についても同様のこととする。

○戦争や空襲体験者はその凄惨な体験を長く封印し、沈黙を守ってきた。戦後75年を経てその思いを公開し託すことを希望する方がいる。その申し出を受け入れること。

《先進事例》

【兵庫県神戸市】

○神戸市では、平和に関する事業の一環として、平成10年(1998)から市民などに対して戦災関連資料や戦争体験談などの収集を呼びかけ、資料などの保全を図ると共に、収集した資料の画像を「神戸 災害と戦災 資料館」としてホームページ上で公開。

○平成17年度(2005)から終戦の日を挟んで、市民から寄贈された実物資料を展示し、戦争を知らない世代に「命の大切さ」「平和の尊さ」を考えてもらうことを目的に、「戦災関連資料展」(神戸市立中央図書館1階)で開催。展示内容は①神戸空襲に関するパネル展示、②市民から寄贈の戦災関連資料の一部(5点程度)。

○担当は行財政局業務改革課。

【神戸市戦災記念資料室】

- 神戸空襲（昭和20年6月）による被害状況に関する記録の収集・保存を行っている「神戸空襲を記録する会」から市立図書館（中央図書館）に寄託された資料を平成8年（1996）に神戸市立兵庫図書館が開館するのにもない中央図書館から移し「戦災記念資料室」を設置。
- 神戸市立図書館は1970年代から各行政区ごとに地域拠点館を設置する方針を立てた。昭和59年（1984）に廃止された国鉄兵庫駅の兵庫臨港線貨物ヤード跡地を再利用したキュナルタウンイースト2階に平成8年（1996）5月に神戸市立兵庫図書館を入居。蔵書数は11館の中で、中央図書館、東灘図書館に次ぎ3位。他の拠点図書館との差別化（独自性）として神戸戦災記念資料室と命・健康コーナーを設けている。

【青森県青森市】

- 「青森空襲」は千人以上の犠牲者を出した。平成28年（2016）に青森市が実施した調査では「空襲の日も内容も知らない」と回答した市民が4割近く。体験者の減少、取り壊される被災遺構の増加。
- 市民団体「青森空襲を記録する会」に所属の相馬信吉氏（68）は、「デジタルで被害を可視化し、若い世代に記録をつなぎたい」と、平成26年（2014）年にグーグルマップを使った地図製作を開始し、当時の写真や証言を記録したデジタル地図「青森空襲被害地図」を作成。地図には焼夷弾による焦げ跡などが残る建物や、焼失を免れた樹木など約20か所を掲載。日々データの更新を重ね、記録の継承を図る。たとえば、蓮心寺本堂の樹齢三百年のイチヨウは、火の手から逃げ惑う人々が木の下に避難したとの証言から地図に「被災樹木」として登録。鐘楼が戦禍を逃れたことが分かり、「遺構」として地図に落とし込む。
- 体験者の証言を朗読して収録し、地図にひも付けする作業に力を入れ、体験者の一覧から名前をクリックすると、朗読映像と被災した場所などが見られる。

【青森空襲資料常設展示室】

- 平成元年（1989）3月に青森市議会が「平和都市宣言に関する決議」を採択。翌年青森市は「青森空襲記念日」にあたる7月28日に「平和都市宣言」。これを受け、青森空襲を記録する会は、資料の大半を市に寄贈し、市と空襲資料展を共催するため、青森市中央市民センター内に「青森空襲資料常設展示室」を設置し現在に至る。

（4）調査研究

- 本市では昭和34年（1959）に市長を会長に全市民一致協力の「前橋市戦災復興誌編集委員会」を組織し、前橋空襲と復興について記録化につとめ同39年（1964）3月『戦災と復興』を刊行した。石井繁丸市長は同書の序文で「本書に収めた戦災編10章、復興編5章は、今にして収録せねば散逸のおそれのあるものばかりで、将来ふたたびくりかえしてはならない惨禍の傷跡と、その復興にどれだけの苦心と努力がなさ

れたかを如実に物語るものであるので、本書が今後の大きな反省の資料となり、あるいは飛躍の踏台として利用されるならば、幸いこれに過ぎるものはない。」と刊行の意義と期待の思いを述べている。しかし、同書は発行時の期待に反して、その後、教育現場を含め十分に活用されてきたとは言い難い。そこで、同書をもとにさらに資料収集やその後の研究成果を踏まえて、前橋空襲と復興に関する調査研究を行い、その成果を社会に還元すること。

○これまで収蔵した資料が保管・展示され、証言や記録など記念すべき節目の年に書籍化やDVD化などが行われているが、調査研究という点で十分とは言えない。たとえば、戦地から家族にあてた軍事郵便などは受入・保存はされているが、その文面についての研究などは行われていないのが、現状である。兵士が記録したものを初めとして、あらゆるものを翻刻し、調査研究することが求められる。

《先進事例》

【岩手県北上市平和記念展示館】

- 北上市藤根地区で教師をしていた高橋峯次郎先生は出征した教え子を激励するため、明治41年（1908）から昭和19年（1944）まで、故郷の近況を伝える会報「眞友」を平均月4回、戦地に送り続けた。その結果、教え子ら約900人が返事として軍事郵便を峯次郎先生に書き送り約7,000通もの軍事郵便が峯次郎先生のもとに残った。手紙には望郷の思い、田畑の作柄を心配する気持ち、厳しい戦況、特攻を待つ気持ちなどが綴られている。
- 昭和56年（1981）に「岩手・和我のペン」（代表菊池敬一）が軍事郵便の調査活動を始める。翌年にNHKがこの調査活動を特別番組として報道しこの軍事郵便が世に知られるようになった。同59年にNHK仙台放送局の協力を得て『農民兵士の声が聞こえる』を出版。
- 平成8年（1996）には国立歴史民俗博物館が、全国的に例が無いとしてマイクロフィルムへの保存を行う。
- 平成10年（1998）に藤根地区では峯次郎先生宛軍事郵便の保存・活用を図り、農民兵士の実状を後世に伝えようと「平和記念館建設検討委員会」を発足。平成14年（2002）に藤根地区交流センターに隣接する藤根生活センター内に北上平和記念展示室が開館。峯次郎先生にあてた軍事郵便、銃、衣服、教科書など約400点を展示。
- ふるさと納税の返礼品（思いやり型返礼品、協賛型）「北上平和記念展示館維持管理支援ワールドコース」—感謝状・パンフレット・小冊子『若き農民兵士の声』が送られる。

(5) 普及

○証言（体験記）や調査研究の成果を、前橋学ブックレット、紙芝居などを通して活字化、映像化し、戦争を知らない世代に風化しないよう普及・啓発活動を積極的に行う。なお、第2期歴史文化遺産活用委員会では、前橋空襲のあった8月5日を「前橋市民の平和祈念の日」とすることを提言。

- 戦争体験を語る場、聞く会を設け、小・中学校、公民館などでの出前講座のような活動も行う。
- 「街なか神社・寺院・教会」と前橋学市民学芸員により行われている前橋空襲一斉慰霊を通して、前橋空襲を語り伝える。
- 各種機関・団体と連携して、広範な普及活動を行う。

《先進事例》

【栃木県宇都宮市】

- 宇都宮空襲のあった7月12日を「宇都宮空襲の日」。
- 7月12日から8月15日までを「宇都宮平和月間」。
- 「宇都宮平和月間」に平和事業に取り組む。
 - 市平和のつどい。戦争の悲惨さや平和について考える「平和啓発リーフレット」の作成（2万部発行、市内の小中学校や図書館などに配布）。

（6）地域づくり

- いまや博物館・美術館は地域づくりの中核を担うことが求められている。文化庁ではすでに「地域の核となる美術館・博物館支援事業」を行っている。前橋空襲と復興資料館も、どのような地域づくりをするかという観点から設置することが必要であると共に、その機能として地域づくりを担うことが求められる。

○各地域に残る戦争関係遺跡の保存と維持

前橋市は昭和、平成の大合併を経て現在がある。旧町村単位に国民皆兵のもと日本が近代国家として戦った日清・日露戦争、第1次世界大戦・シベリア出兵、満州事変・上海事変や日中戦争・アジア太平洋戦争に関する彰忠碑、忠霊塔などがある。これらの記念碑・慰霊碑・忠霊塔などは役場敷地内や付近などに建設された。しかし、合併により役場が公民館になり、公民館が新築移転するなかで、記念碑・慰霊碑・忠霊塔は、忘れ去られたように取り残されている場合が多い。また、建設主体の尚武会・在郷軍人会などの組織は戦後に亡くなり、その遺族たちが組織した団体も、高齢化などによりなくなっている。かつては旧町村単位で慰霊碑や忠霊塔などの前で行われた慰霊祭も一同に集めて行われるようになった。記念碑や慰霊碑、忠霊塔などの市内各所に残る戦争関係遺跡は戦争学習の場である。こうした戦争関係遺跡についても、その保存維持などを行う主体に市当局がなることが望ましい。

《参考事例》

「前橋駅前の戦災復興記念塔」

- 昭和28年（1953）に市全体の復興も進んだので、駅舎が空襲を免れた前橋駅前に建設。御影石の台座の上に男女の裸像（1・8 ㍎）を飾ったもの（全体の高さ3 ㍎）。銅像制作者は

彫刻家の分部順治（高崎市出身）、関口志行市長の揮毫で女性像台座に「平和」、男性像台座に「建設」の文字が刻まれる。記念塔は戦禍に見舞われた人々の鎮魂を願い、前橋の再生と世界の平和を誓ったもの。

○駅前通りのケヤキは同29年（1954）に東武鉄道の路面電車の廃止に伴い植樹。同40年（1965）に記念塔を中心に大投射の噴水が完成。噴水のある記念塔と見事に成長したケヤキ並木が市民の自慢の景観となった。

○あかぎ国体を契機に両毛線の高架化と駅舎の改築が行われ、平成元年（1989）に記念塔は解体され、男女の像が切り離され、並んで駅を利用し前橋市を訪れる人を歓迎する像に変貌。

○平成24年（2012）3月に駅前ターミナル・広場の再整備で、広場でなくバスターミナルの隅に移され、「駅前広場の顔」から「誰も近づけないポツンと佇む像」となって現在に至る。

「前橋公園内の日露戦争彰忠碑」

○明治39年（1906）5月9日、前橋尚武会により厩橋招魂社の裏手に建立。群馬県下の戦病死者の名前を刻み、その遺族を招待し知事臨席で慰霊祭を行う。碑の高さは12尺。頂上に金鶏が両翼を広げ（制作者は前橋市出身の彫刻家・細谷而楽）、「彰忠碑」の文字は大山巖の揮毫。日露戦争の貴重な慰霊碑。

○金鶏は戦時中の金属供出の対象となり頂上から降ろされたが、かろうじて供出を免れ頂上に再設置された。戦後、厩橋護国神社は前橋東照宮が管理したが、彰忠碑のある場所は前橋市（公園管理課）の所有となった。碑を管理した前橋尚武会の後身は高齢化により消滅。

○彰忠碑は、その文字が劣化し「忠」の字が脱落し破損。市民より危険であるとの声があがるが、管理団体が消滅し、管理保存体制が不明確になっている。

「明和観音と殉難碑」

○前橋空襲で平方実業女学校（旧明和高校の前身）の生徒4人が犠牲になった。同校は当時、国領町の電電公社のところにあり、昭和20年（1945）4月から学校工場となり、陸軍将校の軍服を製作。寄宿生は利根・吾妻郡から約50人いた。空襲が始まると寄宿生は校庭の防空壕に避難したが、3人が直撃弾で即死、近くの川に避難した1人も死亡した。

○明和高校は慰霊像「明和観音」と殉難碑を建立し、平成17年（2005）に閉校するまで、8月5日を全校登校日として、先輩の冥福を祈る行事を開催。閉校後は有志が集まって行っていたが、高齢化・減少し現在は行われなくなった。

○高校が閉校後も敷地は併設された明和学園短期大学のものではあったが、令和3年（2021）には平方学園から共愛学園に短大も移管される。学校の再編で慰霊像と殉難碑やその歴史の継承がどのようになるか、現在のところ未定。

むすびに

前橋市は昭和20年(1945)8月5日の「前橋空襲」で壊滅的な被害を受けました。前橋の歴史において「街が灰燼に帰す」未曾有の出来事でした。「前橋空襲と復興」の記録と記憶を断絶させずに、連続的に理解し、前橋市への愛着を育むためにも、公的な資料館は必要です。

全国の空襲に遭った地方都市も事例で紹介しましたように、厳しい財政状況の中、さまざまな知恵を絞り、官民連携して、その記録と記憶を断絶させないために、公的機関としての資料館の設置と維持に努めています。

前橋市においても、この提言書をもとに市長の判断によって、戦後75年を迎えたこの時節に、公的な資料館を設置するよう回答いたします。

令和3年 3月 2日

前橋空襲を語り継ぎ、平和資料を収集展示の形の検討会